

地藏本願經變相図

京都知恩院蔵

二〇九・五×二二七・二一

李朝時代

知恩院には、至治三年（一二三三）の銘をもつ観經變相図をはじめ、数多くの貴重な高麗・李朝の仏画が所蔵されている。

ここに紹介する地藏本願經變相図もその一つで、その存在は早くから知られ、昭和十二年の『知恩院史』文化篇七八頁にも、宋陸信忠筆の伝称と、法量、および、第七十五代知恩院住職、養鸕^{うがいとじょう}徹定の箱書が紹介されている。^{注1}当館においても、昭和五十七年三月の特別記念展示「知恩院と法然上人絵伝」、および同年八月の特別陳列「六道の絵画」に、寺の快諾を得て出陳がかない、筆者が簡単な解説をかけた。但、後者の解説で、図の制作年を、李朝の宣祖八（万曆三、一五七五）年以降、同十（万曆五、一五七七）年以前と限定したが、その根拠となる図中の願文その他を紙面の関係で割愛せざるを得なかった。

本誌を借りて、願文を中心に改めて紹介し、若干の考察を加えたい。

本図は絹本着色で、画絹の寸法は、縦二〇九・五センチ・メートル、横二二七・三センチ・メートル、正方形よりやや横長の巨幅である。

上半分に地藏菩薩とその眷属を、下半には地獄のありさまを描く。

願文は上下ほぼ真中の位置にあり、左右端に分けて、金泥の楷書で以下のように記されている。

淑嬪尹氏感冥府犁黎之苦

即發弘願欲畫地藏菩薩道

明尊者無毒鬼王閻羅十聖

都幀兼畫十八地獄之狀以為

我

仁順王后冥福之資於是比丘尼智明

等皆叩頭曰我等亦蒙 國家

勿翼之恩區々犬馬之息無所

於效而今既若此我等之幸也敢

不同緣各出儲箱之財即倩良畫

盡極精彩如法粧演敬安于慈

壽宮淨社永奉香火焉竊惟三

千大千世界所有微塵盡充為

劫無以喻地藏菩薩證果之久

或聞其名或禮其像或圖畫刻

鏤塑像皆得生於天上今我

淑嬪尹氏興悲感首發願王比

丘尼等樂與同善共成無上之

緣嗚呼 淑嬪^{淑嬪}大發願即地

藏菩薩之願菩薩之願即恒沙

諸佛之願憑斯妙因恭惟我

仁順王后仙駕悟無生忍拋有漏緣直

到堯率天宮徑登安養世界證大
菩提

亦願

主上殿下聖躬萬歲陰陽沴釋年月厄消仁踰五帝

治圖三王

王妃殿下聖壽齊年懿德宣明母儀一國頂娠天縱

協誕生知

恭懿王大妃殿下壽星永曜福辰長明

德嬪邱下壽如寒山不凋福似霜松轉翠 淑嬪

尹氏無[○]障壽命無盡與諸隨喜同緣等[○]

世上生於佛法中同生一處毋忘今日隨喜之[○]

蒙佛受記廣度有情不容擬疑吁基盛哉是歲

九月上[○]繪謹誌

銘記の為の特別の枠を設けてはいないが、図相を損わないよう、地獄界から張り出した雲の部分を利用している。画幅の傷みによって、多少の欠字があるが、内容は大体完結しており、制作事情を明確に知ることが出来る。ただ画幅の左右が多少切りつめられており、末尾の行が「是歲九月上[○]繪謹誌」とあるのみで、銘記の年を知ることが出来ない。大体、この時期の李朝仏画では、願文の冒頭に銘記の年が記されるのが通例であり、恐らく、本図も最初の「淑嬪尹氏」云々の行の直前に、銘記の年が記されていたはずである。願文は「亦願」以下の部分が、スペースの関係で、画幅の左手に移されてはいるが、書体、内容から見て、同一筆者によって、同じ

時期に記されたと見てまず問題ない。

年記の見られないのが残念であるが、既述したように、銘の内容から制作者あるいは銘記の年をほぼ二、三年の間に限定できる。

まず願文の内容のあらましを述べよう。

本図は、淑嬪尹氏なる人物が、冥府^{れいれい}黎黎の苦に感じ、弘願を発して、地藏菩薩、道明尊者、無毒鬼王、閻羅十聖、および十八地獄のありさまを描き、もって仁順王后の冥福の資^{すけ}となさんとし、比丘尼智明らと共に財を投げ出して良画を描かせ、粧潢して、慈寿宮淨社に奉安したものである。

仙駕せる仁順王后が直ちに兜率^{とせう}天宮（弥勒淨土）に到り、ただちに安養^{あんじやう}世界（阿弥陀淨土）に登り、大菩提を証せんことを願うと共に、主上殿下、王妃殿下、恭懿王大妃殿下、德嬪邱下、淑嬪尹氏らのつつがなく長命であることなどを願っている。

仁順王后とは、李朝第十三代の明宗、李峴の妃、宣烈懿聖仁順王后沈氏であり、宣祖八（万曆三、一五七五）年正月二日、四十四歳で薨^{注2}っている。

また、恭懿王大妃とは、第十二代の仁宗、李皓の妃、孝順恭懿仁聖王后朴氏であり、仁順王后の死に遅れること三年足らずの宣祖十（万曆五、一五七七）年十一月二十九日、六十四歳で薨^{注3}っている。

従って銘記に言う「是歲九月上[○]繪」の是歲とは、仁順王后の冥福を祈り、恭懿王大妃の長命を願っている以上、宣祖八（一五七五）年か、同九（一五七六）年、同十（一五七七）年の何れかであり、願文の制作も、宣祖八年正月二日以降、同十年九月上旬以前になされたということになる。

そして当然のことながら、銘記に言う主上殿下、王妃殿下とは、

第十四代の宣祖、李暎とその妃、章聖徽烈貞憲懿仁王后朴氏である。徳嬪邸下とは、宣祖の嬪、儲慶宮敬惠裕徳仁嬪金氏であろう。この人物は、自らの三番目の子供として、宣祖の嗣となった元宗大王、李瑈を、宣祖十三（万曆八、一五八〇）年にもうけており、時期的にも合う^{注4}。

肝心の発願者、淑嬪尹氏については、仁順王后沈氏と関わりの深かった宮中高貴の女性であろうとは思われるが、朝鮮史に不案内な筆者にはそれ以上のことはわからない。

次に、願文の内容、図相、および所依經典である『地藏菩薩本願經』^{注5}の三者の関係について述べてゆきたい。

願文を一瞥して注目される点は、『地藏菩薩本願經』からほぼそのままの引用が見られることである。

第十二行目からの「竊惟」以下の「三千大千世界」より第十六行目の「皆得生於天上」までは、經の忉利天宮神通品第一の

譬如三千大千世界。所有草木叢林稻麻竹葦。山石微塵一物一數。作一恒河。一恒河沙一沙之界。一界之内一塵一劫。一劫之内所

積塵數。盡克爲劫。地藏菩薩證十地果位已來。千倍多於上喻。何況地薩菩薩在聲聞辟支佛地。文殊師利。此菩薩藏神誓願不可

思議。若未來世有善男子善女人。聞是菩薩名字。或讚歎或瞻禮。或稱名或供養。乃至彩畫刻鏤塑漆形像。是人當得百返生於三十

三天永不墮惡道。に基づいている。

この經説は図相にも反映されており、地藏菩薩の真下には、經卷、あるいは画軸を載せるはかりと、その左右に仏像や宝塔をのせる机が置かれ、地藏を跪拜する供養者の姿がその周囲に描かれている。

それぞれに、

權衡

畫像寫經造磬善人

金銀銅鐵作佛菩薩像善人

作禮戀慕人

盡心供養人

一瞻一禮人

の願文と同じ書風の金泥楷書の傍記がある。

願文第二十三行の直ちに兜率天宮に到ることを願う所や、後ろから三行目の「蒙佛受記」の句は、分身集會品第二の仏が地藏に対して弥勒出世するまでの未調伏の罪苦の衆生を度すべきを囑する

令娑婆世界至彌勒出世已來衆生。悉使解脫永離諸苦遇佛授記。

の句と関わりがあらう。

願文に明記される無毒鬼王は、經の忉利天神通品第一に登場し、邪信の母の無間地獄に墮せるを救わんとして来たる婆羅門の女（地藏菩薩の前身）に地獄を案内する鬼王で、財首菩薩の前身である。

図では、地藏菩薩の向って左下に描かれる頭光を有する戴冠合掌の人物がそれにあたる。敦煌画の影響の強い、朝鮮の地藏関係の仏画には、道明和尚が地藏菩薩の眷属として描かれるが、これと対峙する位置に描かれるのが無毒鬼王である。高麗末期の地藏像、あるいは地藏十王像に描かれているものが、閻羅王であるのか、無毒鬼王であるのか、尚、検討の余地があるようだが、李朝に下つてからは、明確に無毒鬼王として描かれていたようであり、本図がその一証左ともなるのである。

無毒鬼王が敦煌画において描かれている例は、今のところ見出さ

れていないようであり、道明和尚と共に、地藏菩薩の脇士的存在として、無毒鬼王が描かれる図像が、敦煌画起源であるのか否かは確認出来ないが、中国の江南、あるいは日本においては見出されず、朝鮮特有の信仰を背景として、地藏図像における眷属的地位を高め^{注6}ていったようである。

次に願文に明記され、図の下半を占める十八地獄は『地藏菩薩本願經』のみに現われる特殊なものではないが、例えば經の忉利天神通品第一で、無毒鬼王が、婆羅門女の地獄はどこにあるかと問うのに答えて、

三海之内是大地獄。其數百千各各差別。所謂大者具有十八。

と述べ、又、觀衆生業緣品第三では、地藏が摩耶夫人に答えて地獄を説明し、

諸有地獄在大鐵圍山之内。其大地獄有一十八所。

と述べる、大地獄を十八所とする本願經の説に背反しない。

図の下半の地獄界には、獄卒が亡者をさまざまに責め苛む場面が描き込まれ、その各々に金泥楷書の傍記があり、

阿鼻無間地獄

石碓地獄

椿磨地獄

鐵鑿地獄

剝口地獄

抽腸拔肺地獄

黑闇地獄

刀山地獄

雪山地獄

鑊湯地獄

業鏡地獄

火坑地獄

鐵鷹地獄

舌翻地獄

銅柱地獄

鋸解地獄

鐵車地獄

釘身地獄

の十八の地獄名が記されている。絹の傷みによって文字を欠く剝口地獄は、場面から判断して、剝皮地獄であろう。

これらの地獄名とその図相は、觀衆生業緣品第三に説く無間地獄のありさま、あるいは地獄名号品第五のさまざまな地獄を参考に、その最もポピュラーなものを撰択しており、宋末元初の寧波において陸信忠らの工房で大量生産された十王図の下半部に描かれる亡者断罪の場面とも共通する所が多い。

ところで、鐵車地獄の、一輪の鉄車にのつて亡者を踏み砕く鬼卒は、右手に劍を持ち、左手に転法輪を持つているが、その転法輪から亡者の来世への転生を示す焰光が出、その下に「輪回」の傍記がある。これは、預修十王經などで、死後、三年を経たのち亡者がたどりつく最後の十王庁、五道転輪王庁の裁断の場面に図像的根拠を持つ。但、本来六道に転生すべき所のものが、ここでは、天女のような女人と、男子、牛馬、餓鬼の天・人・畜生・餓鬼の四道に省略されているのが特殊である。

以上、願文、図相、『地藏菩薩本願經』の三者の間には各々密接な

関連があり、本図は正しく地藏本願経変相図と呼ぶべき、本願経を所依經典とする変相図ではあるが、観経変相図のように、経説と表裏一体となつて絵画化されたものとは言えず、本願経には登場しない道明和尚や、十王が描かれるなど、敦煌画の影響を受け、高麗以来久しく朝鮮に蓄積された地藏・十王関係の図相を総合するに止まるものである。

『地藏菩薩本願経』は地藏三経と称されるものの一つであるにもかかわらず、藏経目録には明藏に至つて始めて現われることから、唐代于闐国の実叉難陀（六五二—七一〇）の訳とすることに、疑問が投げかけられた時期もあつたが、諸種の仏教文献の検討により、製作年代は、唐代にまで遡ると推定されている。^{注7}

引路王菩薩への信仰をはじめ、中国や日本に比して、唐末以来の古典的な信仰形態が根強く保持されている朝鮮では、李朝時代に入つてからも、『預修十王経』や『地藏菩薩本願経』の版行が盛んになされておき、成宗五（一四七四）年、その夏薨去した成宗（九代）妃、恭惠王后韓氏の冥福を祈つて、世祖（七代）妃の貞熹王后尹氏が発願し、『地藏菩薩本願経』を版行させているのもその一例である。^{注8} 本図で冥福を祈願された明宗王妃仁順王后沈氏は、仏を喜び、ことに、明宗十八（一五六三）年順懷世子暉が十三歳にして夭逝してからは一層その度を加え、中宗の継妃にして明宗の母であり、長らく摂政として仏教の隆盛化に権勢をふるい、李朝仏教を甦生せしめし大外護女主とも評される文定王后尹氏（一五〇一—一五六五）と協力して、仏齋供養に日も足らざる有様であつたという。恭懿王大妃も又、これに財物を喜捨した一人である。^{注9}

文定王后の死後、儒家の巻返があり、重用されていた僧虚応普雨

は、済州に流されて殺され、宣祖も又、その治世の初期には、儒家を寵用して、信仏の念著しい後宮と対立し、七（一五七四）年には黄臘事件、浄業院廃止事件が起つて^{注10}いる。その直後に、宮中祈願の本図が制作されていることは、後宮の諸妃女官らの根強い仏教信奉を物語つていて興味深い。

（西上実）

〈注〉

- 1 箱の蓋表に墨書で「地藏本願経變相壹幀 宋陸信忠畫 華頂文庫」とあり、蓋裏には、島津家よりの由来を記す以下の文が一行に墨書されている。「此幅前左大臣崑津久光公所賜也時明治十年二月西郷黨起兵九州大乱時余在鹿兒嶋別院携此幅避乱於郊南和田邨幸得免其難再還京師是菩薩翊護之力也紀之以貽子後昆明治十七年三月九日大教正華頂山第七十五世順譽徹定識時季七十有一」
- 2 『李朝實録』宣宗昭敬大王実録卷第九、乙亥正月壬寅の条。「塔源系譜」二十四頁
- 3 『李朝實録』宣宗昭敬大王実録卷第十一、丁丑十一月辛巳の条。「塔源系譜」二十四頁
- 4 『塔源系譜』二十六頁
- 5 大正一三・七七七No. 412
- 6 無毒鬼王については、高橋亨『朝鮮思想史大系・李朝佛教』（昭和四年）一〇四三頁に朝鮮伽藍の莊嚴を論じて「冥府殿アリ、地獄ノ相ヲ顯シ、地藏菩薩・無毒鬼王・道明尊者及十王ヲ安置ス」と述べ、崔淳雨・鄭良謨『韓國の佛教繪畫—松廣寺—』（一九七〇）八三頁他においても地藏幀中の例が報告されているようである。又、『佛教藝術』九七号（一九七四年）所藏の中野照男「朝鮮の地藏十王図について—日本伝来品を中心として—」においても、作例を示して詳しく論じられている。
- 7 真鍋廣濟『地藏菩薩の研究』（三密堂書店、昭和三十五年）第五章地藏典籍、二、仏説地藏菩薩本願経、八三—九六頁
- 8 韓国東国大学校仏教文化研究所・東国大学校中央図書館『第四回韓國

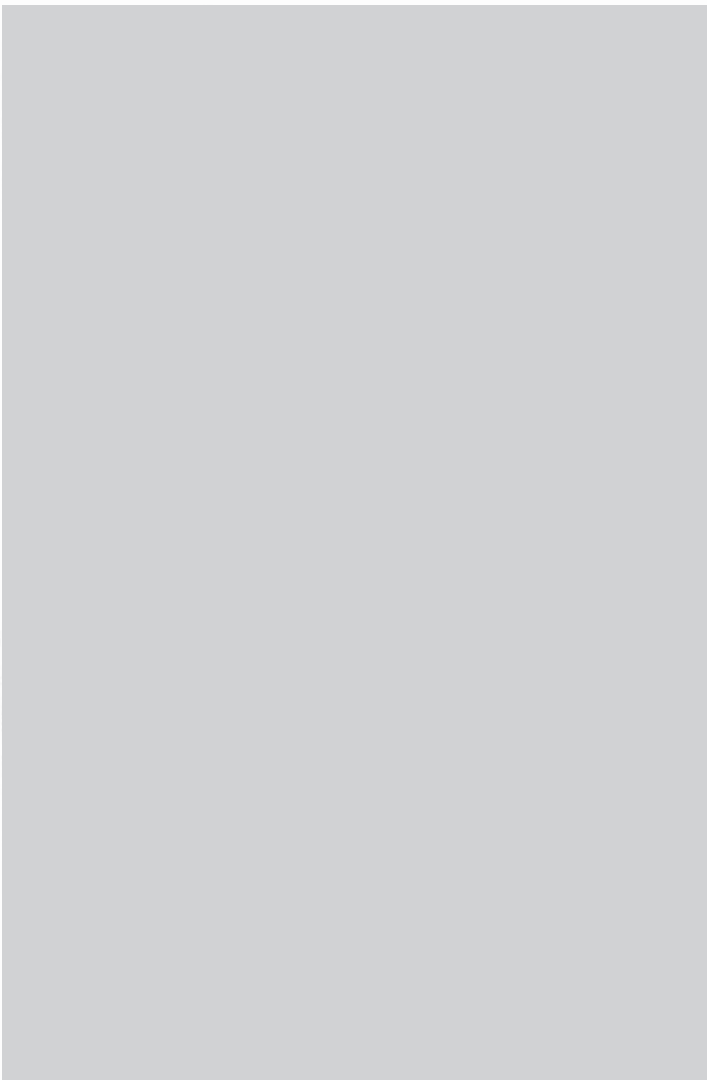
9 大藏會李朝前期佛書展觀目錄』（一九六五年）26―27頁
高橋享前掲書、三四〇頁

尚、文定王后の造仏画活動に関し、山本泰一「李朝時代文定王后所願の
仏画について―館蔵薬師三尊図を中心に―」（金毓叢書第二輯、昭和五
十年）の好論がある。

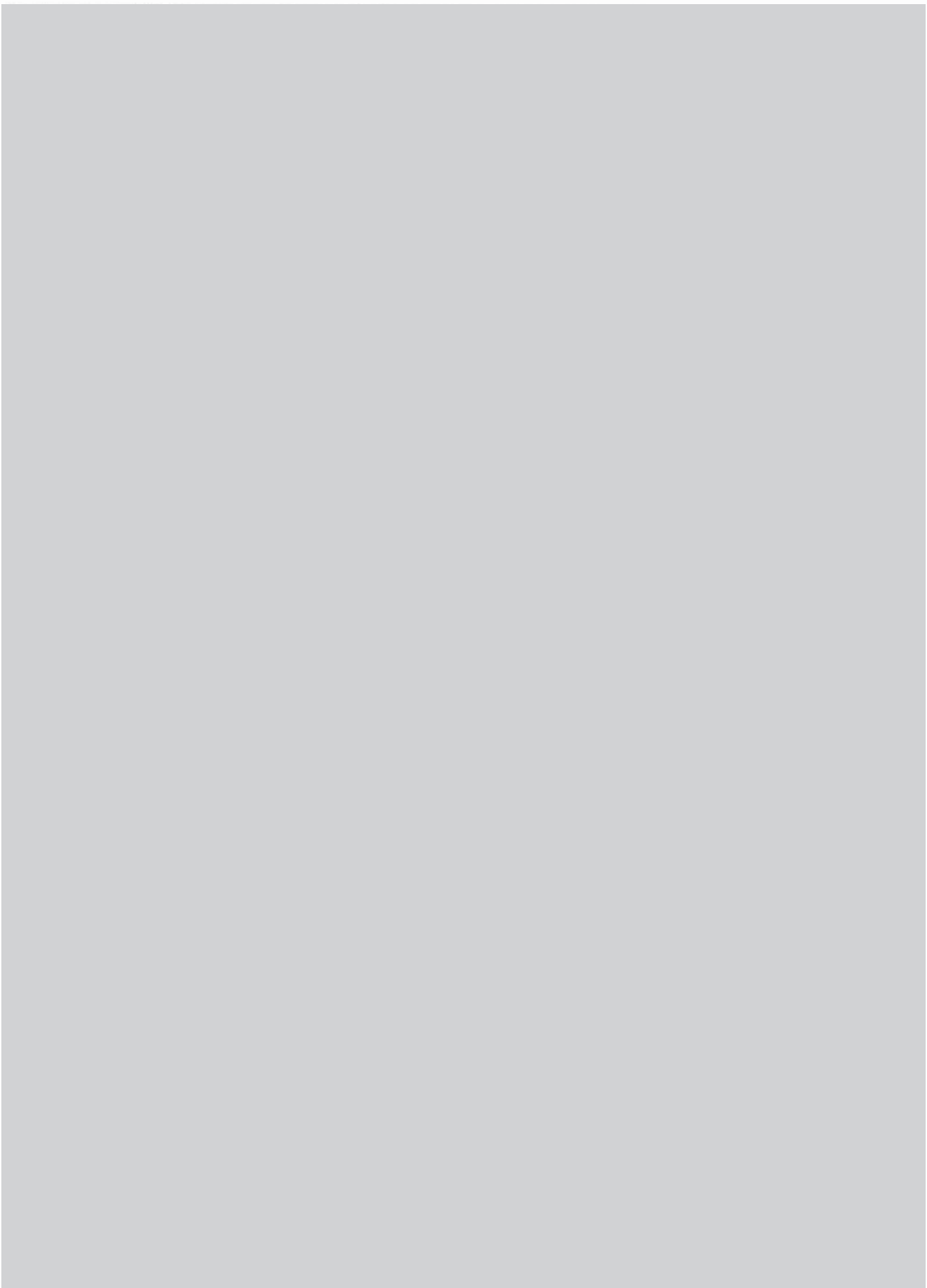
10 高橋前掲書、五三二―五三四頁



地藏本願經變相図 願文 知恩院



地藏本願經變相図 願文 知恩院



地藏本願經变相图 部分 知恩院